

文化 第七十九卷 第三・四号 一秋・冬一 別刷
平成二十八年三月二十五日発行

河口静斎『小学』論の特徴

—江戸中期における儒学教育思想—

高橋 恭寛

河口静斎『小学』論の特徴

—江戸中期における儒学教育思想—

はじめに—太宰春台と河口静斎—

高橋 恭寛

朱子学の学問世界には、『小学』という初学教育書がある⁽¹⁾。朱熹の語録をまとめた『朱子語類』でも「若い初学の者たちは先ずは、『小学』の書を読みなさい。あの書はまっとうな人間になる見取り図だ（後生初学、且看小学之書、那是做人底様子）」⁽²⁾という朱熹の発言が収録されているように、『小学』は「朱子学」に入学者であるならば読まねばならない書であった。「朱子学」を奉ずる者であるならば、朱子学の中核にある儒教経典・四書（『大学』『論語』『孟子』『中庸』）のみではなく、入門書たる『小学』から学習するという階梯を無視することは出来ないはずである。

近世日本においても（朱子学尊崇）など見なされた闇斎学派（敬義学派）では、山崎闇斎高弟の三宅尚

斎（一六六二—一七四一）や、その弟子の蟹養斎が実際に『小学』を自らの学塾の学習階梯に組み込んだ。とくに蟹養斎（一七〇五—一七八）は、『小学』が『大学』の段階へと接続される理論化を試み、『小学』学習の必要性を説いた儒者である⁽³⁾。三宅尚斎や蟹養斎のような『小学』への注視は、一八世紀に入り学塾が徐々に社会のなかに広まってゆく時勢のなかで、『小学』を実際の儒学学習に活かす理論構築の過程のうちを生じたものであった。

ところがこの『小学』は、近世日本の儒学世界のなかで、必ずしも重んぜられた書ではなかった。なぜならば、読書対象が子供たちであると『小学』の書題で述べられているが、実際のところその内容は、儒教経典を含む諸典籍からの抜萃によって構成されている。

『小学』を大きく分けると内篇と外篇という二つに分かれている。更に内篇が立教第一・明倫第二・敬身第三・稽古第四の四篇に分かれ、外篇が嘉言第五・善行第六の二篇によって構成されている。

今其の全書（筆者注・古の「小学」に関する書物総体のこと）は、見るべからずと雖も、伝記に雜出する者、亦多し。（中略）今頗る蒐輯して、以て此の書と為し、之れを童蒙に授け、其の講習に資す。（4）

このように諸漢籍の引用によって構成される『小学』という書は、子供たちに授け、講習に役立てる為のテキストと見なされながら、同じく大陸由来の初学者向けの入門書たる『三字経』などと比較すれば、相対的に読解に努力のいる入門書となっている。分量もあって小品とは言えず、決して〈初学者〉が手に取りやすい書とは言えないだろう。

その〈難解さ〉を率直に指摘し、『小学』が子供向けの入門書としての体をなしていないと真っ向から批判したのは、荻生徂徠門下の太宰春台（一六八〇～一七四七）であった。

春台の經典批評は、「孟子論」が有名である。この「孟子論」は、『斥非』という随筆集（一七四四年刊）の「附録春台先生雜文九首」のうちに収められた

一品であるが、春台による『小学』批判「朱氏小学弁」も、この「附録」のうちの一品であることは、あまり知られていない。没後、「孟子論」と同じく『春台先生紫芝園後稿』巻之八に収録されている（5）。

春台は、この「朱氏小学弁」によって、『小学』が子供向けの書ではなく初学教育書として不適切なことをいくつかの論点に絞って提示した。

その春台の『小学』批判に対して反駁を加え、『静斎小学弁評』という一書をなしたのが、本稿で取り上げる河口静斎という儒者である。（6）

河口静斎（一七〇三～五四）は、名を光遠、字を子深。室鳩巢に師事し、川越藩の松平朝矩に仕えた。代表作として、小品ながら藤原惺窩以来の儒者たちの学統、学説の大略を記した『斯文源流』（一七五〇年刊）という江戸前期儒学史の著作が知られている。儒学思想史のなかで河口静斎の名は、この『斯文源流』の著者として知られる以外で取り上げられることはほとんどなかったと言ってよいだろう。ただ近年、室鳩巢や雨森芳洲など木下順庵一門の和文随筆が注目され、河口静斎とその随筆も考察の俎上に挙げられることもある（7）。静斎の著作は、考証的な〈随筆〉が多く、〈儒者〉として論ずる静斎の儒学思想それ自体は、「朱子学」に立脚したものであり、特別目を引くこ

とがこれまで無かった。そのため河口静斎に関する思想的な分析はほとんどなされてこなかったと言える。

ところが河口静斎は、春台の『小学』批判へと反駁を加える為に、なぜ『小学』が必要なのか、改めて自らの筆によって説明しなければならなかった。朱熹の主張が子供への教育として不適切である、という春台の批判に対して、単なる朱子学的な言説のおうむ返しでは、春台からの批判に応えたことにはならない。もし春台の誤読や誤解があるならば、その誤読や誤解を指摘しなければならぬ。批判を受けて、静斎が能動的に朱子学学習における『小学』の位置付けを自らのことばで説き直したのであれば、そこに、静斎の『小学』理解を垣間見ることが出来るであろう。

そこで本稿では、太宰春台の『小学』批判を踏まえ、河口静斎がどのような『小学』観を有しており、初学者教育をどのように考えていたのかを明らかにしてゆく。

河口静斎という儒者による、儒学の初学教育書『小学』理解を明らかにすることによって、近世日本において儒学という「学問」がどのようなものと理解されていたのか、そしてどのようなかたちで人々に学習されることが期待されていたのか、その一端を垣間見ることが出来る⁽⁸⁾と考える。それではまず、太宰春台によ

る『小学』批判の論点から見てゆきたい。

一 太宰春台による批判

― 『小学』は子供向けなのか ―

朱熹『小学』は、大きく内篇、外篇という二部構成になっている。内篇とは、儒教における徳目や倫理道德をまとめたもので、内篇は立教第一、明倫第二、敬身第三、稽古第四の四篇でなっている。外篇とは、内篇で言われていることの正しさを証明するため、漢代以降の人々による言行をまとめ、嘉言第五、善行第六の二篇でなっている。『小学』において中心となるのは、立教第一、明倫第二、敬身第三である。立教第一は教えの本質についてまとめられ、明倫第二は父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の五倫が「教え」であることを明かにし、敬身第三は宋学の居敬の実内容が明倫の実行に他ならないことを示している。明倫第二の項目は、更に「明^三父子之親^二」「明^三君臣之義^二」「明^三夫婦之别^二」「明^三父長幼之序^二」「明^三朋友之交^二」という五つの細目によって構成されている。同様に敬身の項目も更に「明^三心術之要^二」「明^三威儀之則^二」「明^三衣服之制^二」「明^三飲食之節^二」の四つ細目に分けられている。⁽⁸⁾

このような『小学』の構成を踏まえて春台による『小学』批判を見てみると、とりわけ内篇の立教第一から稽古第四までの四篇への批判が大半である。そこで本稿ではとりわけ内篇への批判が中心となる。

さて春台は、まず立教第一への批判に入る前に、「小学」という言葉の出所から確認する。『漢書』食貨志上の「八歳にして小学に入る。六甲・五方・書計の事を学ぶ」という一節を根拠に、「六甲（千支の巡り）・五方（東西南北中央の方向）」・「書計（文字と計算）」を学ぶ〈施設〉が「小学」であるとしている。

確かに朱熹も『大学章句』の序文「大学章句序」において、上記『漢書』食貨志の一節を踏まえて、八歳から「小学」に入るものであると説く。ただ朱熹は、さらに「灑掃・應對・進退（掃除と客対応とたちふるまい）」など、『礼記』由来の礼法に関しても「小学」の段階における学びとしていた。

人生れて八歳なれば、則ち王公より以下、庶人の子弟に至るまで、皆な小学に入る。而してこれに教うるに灑掃・應對・進退の節、礼・楽・射・御・書・数の文を以てす。⁽⁹⁾

しかし春台は、掃除と客対応とたちふるまいなどは家庭内で学ぶものであり、「小学」という施設で教師から学ぶ性質のものではないと批判する。

謹んで案ずるに『漢志』称なふるに、古は人生八歳にして小学に入る。六甲・五方・書計の事を学ぶ。（中略）凡そ童子皆な之れを学ぶ。然るに童子の学、僅かに此に止む。他灑掃・應對・進退の節、曲礼・少儀の記す所の如きは、乃ち子弟の職、父兄の教ふる所に係る。必ずしも諸れを師に受けざるなり。⁽¹⁰⁾

このように春台は、まず朱熹『小学』という書が子供達という〈学ぶ者〉のための書ではなく、家庭内で子供達を教育する父兄など〈教える者〉のための書であると主張した。実際のところ『小学』立教第一のなかには、「胎教」に関する記事すら載っている。そのような内容の記事は、子供向けではなく母親に向けた記事ではないかと批判している。

今朱子の著す所を觀るに、首篇立教を曰ひて、其の記す所は皆な教へる者の事なり。夫れ子弟を教誨するは、父兄の事。童子に告ぐる所以に非ざるなり。且つ篇首に載する所の胎教の法、乃ち人の母為る者の事なり。童子之れを聞き、将さに焉くんぞ之れを用ひんとせん。朱子以て小学の事と為す。其の謬り一なり。⁽¹¹⁾

「胎教」は分かりやすい例であるが、春台による最初の批判の要点は、〈学ぶ者〉に対するものなく〈教える

者」に向けた内容となつてゐる点である。これでは學問に入ったばかりの子供が用ゐるテキストとは言えないと春台は批判した。

次に春台は、明倫第二に關して批判する。明倫第二とは、儒學世界における基本的な人間關係の正しい在り方（五倫五常）について言及した篇である。父子・君臣・夫婦・長幼・朋友という五つの人間關係を「五倫」という。そしてその五つの人間關係において、それぞれ守らねばならない徳目として、父子の「親」、君臣の「義」、夫婦の「別」、長幼の「序」、朋友の「信」を、「五教」、もしくは「五常」と言う。

春台は、この五つの道（五倫）を『小学』で教えること自体が不適當であると批判する。父子・君臣・夫婦・長幼・朋友という五つの人間關係のうち、そもそも君臣・夫婦・朋友の三者は、成人になつてからのことであるのだから、子供が急いで學ぶところではないと春台は述べる。

父子の親は、孝なり。長幼の序は、悌なり。子弟の道は、固より童子の宜しく聞くべき所なり。仕へて后ち君臣有り。男娶り女嫁して后ち夫婦有り。既に冠して后ち朋友有り。此の三倫は、皆な成人の道なり。童子の急ぐ所に非ざるなり。⁽¹²⁾

そして「五教」とは、人々が一生涯守るものであ

り、子供のみに教えるものではないとしてゐる。春台は、「五倫」の道を『小学』の段階での教えとすることに批判的であつた。

夫れ五教とは、司徒の布く所なり。凡そ民の終身の守りなり。豈に専ら之れを童子にのみ責むべけんや。況んや之れを語るに成人の道を以てするをや。朱子以て小学の事と為す。其の謬り二なり。⁽¹³⁾

ここまで『小学』の立教第一と明倫第二の内容の批判について確認してきた。春台の批判の主眼は、『小学』読書の対象者を子供に設定した記事が採用されてゐるようには見え、また学習する側ではなく、成人、君子など教育する側が対象の内容となつてゐる点であつた。明倫第二以下、敬身第三や稽古第四などについても、ほぼ同様の角度から批判が展開されてゐる。敬身第三であれば「惟だ飲食のみ童子に於て近しと為す。然るに亦た父兄の教ふる所に係る。小学の先とする所に非ざるなり。」⁽¹⁴⁾と述べており、稽古第四であれば「古を稽ふるは、君子の事なり。『尚書』に録する所の如きは是れのみ。『小学』は童子にて古を稽ふるも、亦た其の宜しきに非ざるなり。」⁽¹⁵⁾と述べてゐるように、『小学』の取り上げる内容が、總じて子供に向けたものではないことを批判してゐるのである。

以上、春台による批判の要点は、朱熹が聖人の道を

理解しておらず、『小学』という子供向けの書を妄りに作成して世を惑わせたことにあった。

夫れ朱子は本と先王の道を識らず。亦た古は小学の学を為す所以を知らず。而るに妄りに意を是の書に擬作す。以て天下後世の人を誤つ。其の罪亦た大ならずや。(16)

そもそも太宰春台は、荻生徂徠の古文辞学に共鳴し、徂徠による朱子学（宋学）批判を更に推し進めた人物であった。ただし春台は、徂徠門下のなかでも「礼」をへ心の在り方へに引きつけて解釈し、個々一人身における修養の問題にこだわったことで知られる人物である(17)。一方の朱熹『小学』も、「灑掃應對」といった作法をはじめ、様々な「礼法」に基づいて（とりわけ子供の）一身の修養が目されている。本節で見ってきたように、春台が「朱子学」における「礼法」の在り方と、それに基づいた修養の在り方を受け入れられなかったのは、「朱子学」の体系に組み込まれた書であったというだけではなく、何よりもその具体的内容自体にも瑕疵を見出だしていたからであった。

一方、本節で見てきた春台による朱熹『小学』理解に対して反論の筆を執ったのが、河口静斎である。そこで次節では、静斎が春台の主張に対してどのような批判したのかを見てゆくことにしたい。

二 静斎による反駁

— 子供のためだけではない一書 —

河口静斎は、『静斎小学弁評』というタイトルで春台の『小学』批判にに応じている。奥書に「延享丙寅夏四月」と記されているように、春台の『小学』批判を収録した『斥非』が出版された翌年の延享二年（一七四五年）に著された書であった。

春台が難じたように、『小学』が「教える側」に向けた書になっているという点と、子供向けの書になっていないという点について、静斎は正面から反論する。

『静斎小学弁評』において静斎は、春台の「朱氏小学論」を節ごとに引用して、その一節ごとに自らの意見を述べるかたちで反駁を加えてゆく。

まず春台の「古は人生八歳にして小学に入る。六甲・五方・書計の事を学ぶ。」に始まる一節を引用し、ここで春台が「他灑掃・應對・進退の節、曲礼・少儀の記す所の如きは、乃ち子弟の職、父兄の教ふる所に係る。必ずしも諸れを師に受けざるなり。」と述べた箇所における静斎の反論を見てみたい。ここで春台が父兄から教わる内容（灑掃・應對・進退）まで、教師（学校）から教わる「小学」の段階の書籍に載せられてい

ることを批判したことについては、前節で確認した通りである。

これに対して静斎は、そもそも教えを子供に授ける対象を父兄と教師と二者に分けることそれ自体を批判する。父兄であろうと教師であろうと教えは教えであり、学びは学びである。父兄から学ぶものを〈子供の学び〉とせず、教師から教わるものを〈子供の学び〉とするような、教える対象によって分けること自体を否定する。

諸れを父兄に受くるも諸れを師に受くるも一なり。教えに非ざるは莫きなり。学に非ざるは莫きなり。即ち教しば日に書計を学ぶは、漢志の称する所の如し。亦た或いは父兄の之れを教ふ、或いは師の之れを教ふる、何ぞ必ず彼れを以て童子の学と為し、此れを以て童子の学に非ずと為さんや。且つ諸れを師に受くるを以て学と為し、諸れを父兄に受くるを以て学に非ずと為す。其の字義・文意に於て通ぜざること甚だし。(18)

そして静斎は、春台が『漢書』を持ち出してきて主張した「小学」の対象が子供であるというそもそもの主張を否定する。静斎にとって、「小学」の学びは、一生涯のものであり決して子供のときに限らない。

小学を以て成童以下の学と為く、実に終身の事と

為すを知らず。此の誤り、吾が党の諸儒免れざる者多し。宜なるかな、太宰の妄言なるや。(19)

ただ、それは「朱子学」を奉ずる儒者でも誤解することであると静斎も認めている。実際に朱熹が自ら『大学章句』の序文において「曲礼・少儀・内則・弟子職諸篇の若きは固より小学の支流余裔」と述べているように、朱熹『小学』が「灑掃・応対・進退」の礼法を取り上げるために収録した儒教経典の一つ『礼記』所収の曲礼篇や少儀篇といった各篇には、確かに〈子供向け〉という部分が存しており、古代「小学」施設に端を發した分派末流（「支流余裔」）の言説に過ぎないと明言している。したがって『大学』こそ根本模範（「本源領袖」）であり、『小学』は分派末流に過ぎないという見方が生じた。そのため『小学』を一生涯の〈終身の学〉とは見なされずに軽んぜられ、子供の学としてのみ見られるという誤解があったと静斎は述べており、「朱子学者」たちの誤解を指摘しようとした。

しかし静斎からすれば、「本源領袖」・「支流余裔」という分け方は、事の軽重を断じたものではない。『大学』『小学』の違いとは、教えの〈細やかさ〉の相違に過ぎないと述べる。

朱子の意、大学を以て本源領袖と為し、小学を以

て支流余裔と為す。曲礼等の記す所を以て更に小学中の支流余裔と為すに非ざるなり。且つ小学を以て支流余裔と為すは、之れを軽んずるに非ざるなり。謂ふところは其の教えの細碎、大学の道に異なるのみ。⁽²⁰⁾

静齋は、『大学』と『小学』の位置付け自体を、春台がそもそも誤解していると指摘することによって春台が立脚している前提を覆し、批判を無効化しようとした。

それでは前節で取り上げた、春台による『小学』立教第一・明倫第二への批判を、静齋が具体的にどのよう反駁していったのか、見てゆくことにしたい。

春台は立教第一を取り上げて、『小学』が学ぶ側に向けた書となっておらず、教える側のための内容になっていることを取り上げたのであった。

これに対して静齋は、『小学』立教第一の内容が、教師の教える方法であるとともに、弟子が学ぶ方法でもあることを同時に盛り込まれていると反論した。そのため子供もまたこの篇を聞くことによって、教えとは何か、学ぶとは何かを知ることが出来るかと静齋は考えている。「童子の之れを聞く、將た焉くんぞ之れを用ひんや、朱子は以て小学の事と為す。」とは、〈子供〉に限定するやり方に批判を加えた春台の言葉である。

朱子既に題して立教と曰ひ、又た師たる者をして教ふる所以にして弟子をして学ぶ所以を知らしむと曰ふ。今乃ち云ふ、童子の之れを聞く、將た焉くんぞ之れを用ひんや、朱子は以て小学の事と為す。一に瞽者の争色、聾者の弁音に似たり。⁽²¹⁾

さて次に『小学』明倫第二に関する議論を見てゆく。春台は、『小学』明倫第二の構成そのものを批判し、父子・君臣・夫婦・長幼・朋友という五つの人間関係（五倫）のうち、君臣・夫婦・朋友の三者は、成人になってからのことであるため、『小学』の段階で教えることは不適切であるという批判を行っていた。

この春台の批判に対して静齋は、君臣にせよ、夫婦にせよ、その関係が成立してから学んだのでは遅い。その前に先ず予め学んでおくことが重要であると反論している。

此の言や、父母有りて孝を知るを須（もと）め、兄長有りて悌を知るを須む。固より是なり。既に仕えて始めて事君の道を学び、既に娶りて始めて居室の道を学ぶ。亦たただ晩からずや。渴して井を掘る。闘して兵を鏖る。此の譬え人々習ひ聞きて喜（この）みて之れを道ふ、其の事理に切たるなり。豈に太宰にして知らざらんや。⁽²²⁾

このように成人になってからの記事が載っている理

由を説明することで、子供向けの書であるからと言って子供用の記事しか載せないという見方自体を否定したのである。

以上のように静齋は、春台が『小学』を批判する根拠、『小学』の内容が「教える側の教え」になっていく点と、「成人向けの内容」が載せられている点とに対して反駁を加えた。その反駁は、春台の批判がそもそも『小学』の意味をはき違い、誤解していると指摘することで、批判を無効化するやり方であったことが分かる。

ただ、『小学』は、『小学』の読書のみで完結するわけではない。『小学』の次には『大学』が控えている。朱熹は「小学は、その〈事〉を学び、大学は、其の小学の学ぶ所の〈事の所以〉を学ぶ。」（『朱子語類』巻七、第六条、記録者は甘節。）のような見解をしれば述べている。そのため『小学』の読書の意味付けは、『大学』の意味付けにも影響するのである。

ここまで静齋が『小学』をへ誰もが一生涯学ばねばならない書としてきたことを見てきた。ところで静齋は、『小学』から『大学』へと至る儒学教育をどのように考えていたのであろうか。そもそも『小学』は学問の入り口において読まねばならない書とされているように、その後も学業は続いてゆく。『小学』は『小

学』のみで完結しないのである。『小学』へと言及することは、同時に、その次の段階である『大学』の前段階としてどのような意味があるのか、『大学』学習も視野に入れた見解を示す必要がある。

そのような『小学』と『大学』との関係について静齋がどのように考えていたのか、闇齋学派と比較して、静齋の『小学』理解の独自性を見てゆくなかで明らかにしてゆきたい。

三 闇齋学派との違い

― 『大学』と『小学』の関係 ―

本節では、闇齋学派（敬義学派）の儒者たちの『小学』理解を確認し、河口静齋の『小学』理解との比較によって静齋の特色を明らかにしてゆきたい。無論、闇齋学派における『小学』理解といっても、闇齋学派のなかにも、『小学』を積極的に儒学学習に取り入れようとはしない者も存在し、闇齋学派たちのなかで一致した見解があるわけではない。ただ、そのなかでも代表的な闇齋学派の儒者の『小学』の見方について確認してゆく。

さて山崎闇齋高弟の浅見綱齋は「其教ニナリテハ、小子ノ時ト大人ノトキトノ違イ在ル管ノコト、其小子

ノ学ヲ小学ト云ヒ、大人ノ学ヲ大学トハ云ゾ。(23)と述べ、また若林強斎は「子共ノ育テハ小学、オトナノ精ゲハ何国デモ大学。和漢古今ノチガヒハコレニハナイ。」(24)と述べているように、原理的には『小学』を子供の学、『大学』を「大人の学」という位置付けで理解していたことが分かる。彼等は、ここでの「大人」「小子」をそのまま大人と子供に当てはめている。そのような見方を静斎が批判したことは、前節で確認した通りである。

一方、閻斎学派のなかでも『小学』を実際の学習課程のなかへ積極的に組み込もうと試みた者もいた。冒頭でも取り上げた三宅尚斎は、『小学』を子供の学とは言わず、一般庶民も読むべき書として提示し、自らの学塾の学習課程に組み込んだ。尚斎の私塾「培根堂支堂」とは、初学者用の「培根堂」と次の段階である「達支堂」という二つに分かれていた。この「培根」「達支」という言葉も、『小学』〈題辭〉に見られることばである。(25) その初学段階の学習を掌る「培根堂」において、『小学』を子供だけではなく大人も含めて学ぶ必要のあることを説いたのであった。(26) 尚斎は「夫れ農工商賈の徒の若くんば、則ち固より人を治むるの責無し。唯だ小学を学びて足れるのみ。」と述べていることから窺い知れるように(27)、儒学とは治人

の学（為政者の学）でもあるため、『小学』は庶民でも学ぶだけで十分だが、その次の段階たる『大学』は〈士大夫〉層、すなわち庶民より上位の為政者層が学習せねばならない書として理解していたのであった。

この尚斎の主張を継承し、その上で『小学』に関して自らの見解を付け加えたのが、尚斎門下の蟹養斎であった。本稿冒頭でも述べたように蟹養斎は、『小学』がなぜ次に『大学』へと接続されるのか、その理論化を図ることによって、『小学』の必要を明らかにした。

養斎は『小学国字解』という仮名書きの『小学』注釈書のなかで、『小学』と『大学』との学習段階の違いについて説明している。『小学』は、まず「道」の大筋をへさしあたり、〈粗々〉と内容を掴むためのものであり、『大学』の段階で、その粗々と掴んだものを根幹として、細かく推し広げてゆくことである。

小学ノ教ハサシアタリテ、ツトムベキ大筋、スナハチ上ニタツ身ニテハ、下ヲトリマワス、本トナル処ナリ、大学ノ教ハ、カノサシアタリタル、道ノ大筋ヲ本トシテソレヲコマカクスマシヌキ、又ワレヨリヲシヒロゲテ国天下ノトリマワシマデモ、十分ニユキト、クヤウニシツカリトミカキヲスルナリ(28)

養齋の理解によれば、『大学』を学ぶことで得られるはずの「道理を窮める」方法論は、『小学』という礼法を体得するなかで「粗々と」心に萌し、それによって『小学』の勤めの根幹が固まると説いている。

真理ヲキワメルコトハ、大学ニイリテノコトナレド、小学ノ内カラシテ、ソノワザヲナラフ、ソノワザヲナロフ内ニモ、アラノト、ソノ理ハ心ニウツリテ、スナハチ小学ノツトメノ根カ、タマルナリ⁽²⁹⁾

このように、蟹養齋も河口静齋と同様に、『小学』と『大学』との間に質的な差を求めるとはしない。しかし蟹養齋は、『小学』が「粗々」と学ぶものであるという理解を有しており、『小学』は「支流余裔」で教えるの「細碎」であるという静齋の理解とは正反対の見方をしていると言える。

ここまで、静齋と同じく「朱子学」を奉じて『小学』に注目した閩齋学派の儒者たちと比較したところ、静齋の『小学』の見方とは異なることを見る事が出来た。

閩齋学派の『小学』理解は、常に『大学』との違いのなかで論じられていた。静齋も『小学』を一生涯にわたって読まねばならない「終身の書」と見なしており、決して『大学』と『小学』との関係を無視して

いるわけではない。本来、朱熹も『小学』を「小子の学」と見ていたはずである。それならば静齋は、『小学』と『大学』との段階論をどのように考えていたのであろうか。

そもそも朱熹は『大学章句』の序文「大学章句序」や、朱熹による解説書『大学或問』において、『大学』と『小学』の位置付け、すなわち「大人の学」と「小子の学」について言及している。『大学或問』冒頭において朱熹は、大学の道が「大人の学」であり、「大人の学」の反対が「小子の学」であると述べている。「小子の学」については、『大学章句』の序文に記したと述べるに留めている。

或ひと問う、大学の道、吾子以て大人の学と為すは何ぞや、曰く、此れ小子の学に対して之れを言うなり。曰く、敢えて問う、其の小子の学と為すは何ぞや。曰く、愚序文に於て已に略ぼ之れを陳て、而して古方の今に宜しき者も亦既に輯めて書と為す。⁽³⁰⁾

その「大学章句序」において「人生れて八歳なれば、則ち王公より以下、庶人の子弟に至るまで、皆な小学に入る。」を述べていたことは、先に引用した通りである。このように、そもそも朱熹が、上述の通り『大学』は「大人の学」、『小学』は「小子の学」を学

ぶと述べており、一見すれば、既に『小学』が子供向けの書という見方を表明している。だからこそ春台も「子供向け」として、朱熹の見解の矛盾を突くかたちで批判したのであった。

したがって「大人」を「おとな」、「小子」を「こども」と見なさず、『小学』を一生涯の学としたことによつて、新たに両書の関係について語らねばならなくなったのは静斎のほうであった。それでは静斎は、この「大人」と「小子」をどのように理解していたのであろうか。『小学』と『大学』の位置付けの考察については、『静斎小学弁評』の附録「小学論」から窺い知ることが出来る。

「小学論」において静斎は、そもそも「大人」が一五歳以上、「小子」が一五歳未満とする解釈が自明のものではなく、「錯誤」とまで主張する。実際に『小学』のなかには、子供向けとは思えない記事を掲載していた。しかし静斎は、子供向けの記事が載っているのであれば、それは『小学』が単なる子供向けの書ではないことを意味すると肯定的に捉え、そもそも「大人」「小子」の意味が十分明らかになっていないとして、「小子」即「子供」とする理解を退ける。「小子」の対象を明確にすることで、「小子の学」たる『小学』の対象者を再定義しようとしたのであった。

今人、大人小子の名義に於いて曉かならざる所有り。錯認して十五歳以下を小子と為し以上を大人と為す。猶ほ方技家の称する所の大人小児の類と云ふのみ。故に小学専ら小児の事と為し、復た成人の者に関はずと説く。是に於いて疑いを生ず。朱子小学書に載する所は専ら小児の為ならざるのみ。竟に其の説を得ず。訶詆百端するも、其の實、大人小子の義を悉くさす。⁽³¹⁾

静斎は、上述の通り「一五歳以上、一五歳以下」という年齢による「大人」「小子」の分け方を採用しない。その一方、「大人」「小子」の違いが「尊長卑幼」の違いによるものという見方は取り入れた。ここでの「尊長」と「卑幼」の比較は、単に地位や年齢を指すだけではない。〈位〉や〈徳性〉など「上」という立場全般として捉えている。逆に「下」というのは、君主であろうと両親であろうと何であれ、へ上に従う立場をまとめて「下」とみなしたのであった。

蓋し大人小子の称、経伝子史枚挙すべからず。而るに十五以上を大人と為し以下を小子と為すと謂ふ者は、未だ嘗て一たびも見ず。唯だ尊長を大人と為し卑幼を小子と為さざるのみ。或いは爵、或いは徳、皆な通じて称すべし。特だに年齒に拘するせざるのみ。⁽³²⁾

『大学』の学問とは「人の上に在るの道」であり、『小学』の学問とは「人の下に在るの道」であるとした。年齢によってのみ分けられるのではない。結果的に一五歳以上に成長して聡明さを發揮してから教わるのであって、一五歳以上だからといって学ぶものではない。このようにまとめることで静斎は、『小学』や『大学』の読書を単純に年齢によって区切ることを否定したのであった。

「大人」「小子」を単に年齢のみで分けないという発想は、元々室鳩巢の理解を踏まえていると静斎は語っている。

鳩巢室子大学に疏するや、大人の学を解して以て齒徳長人の称と為す。是れに先んじて諸儒は解すること此に及ぶ者無し、故を以て大人小子の説、朦朧として弁せず。此の疏一たび出するに至りて別扶分明す。⁽³³⁾

ここで挙げられた室鳩巢の『大学』注釈書とは、『大学章句新疏』（一七〇二年自序）のことである。静斎が「齒徳長人」と述べているのは、『大学章句』の冒頭「大学之道、在明明徳、在親民、在止於至善。程子曰親、当作新。」の朱註「大学者、大人之学也。」に對して鳩巢が「大人は長大の人、齒ひ有て人に長たる者なり」と語釈した箇所のことを指していると思われる。

る⁽³⁴⁾。ただ、室鳩巢の場合は、あくまで『大学』解釈における「大人」語釈の次元に留まっておき、『大学』と『小学』の段階論にまで踏み込んだ字義ではない。静斎は、鳩巢の見解を踏まえ、更にそれを展開させたと言えるであろう。

このような静斎の主張は、庶民も含めて誰もが『小学』を学ばねばならない一方『大学』は為政者の学であるとした三宅尚斎の見解と類似しているようにも考えられるが、どのような点で両者は異なるのであろうか。

尚斎も確かに「尊長」が学ぶものを「大学の道」と見なしている点は、静斎と変わらない。ただ尚斎の場合、『大学』を学ぶ者は、「人を治むるの責」を有する者であることから（前出・三宅尚斎『小学筆記』序）、「尊長」を為政者の立場としていることが窺える。庶民を含めた誰もが学ばねばならない『小学』の段階と、為政者（士大夫）にのみ限定された『大学』の段階という二階層があると尚斎は理解していた。

一方静斎は、「尊長」を「上」の立場としてはいるが、決して為政者にのみ限定したわけではない。為政者にせよ親子関係にせよ、何かしらへ上に立つ立場の者」をまとめて「上」と解釈した。このことから静斎の「大人」「小子」理解は、尚斎とも一線を画するので

ある。

確かに朱熹は「大人の学」と「小子の学」とを分けて、「小子の学」のほうを『小学』と関連付けていた。その点を太宰春台が論難してきたにもかかわらず、静斎は「小子の学」の「小子」の範囲を朱熹すら詳らかにしていないことを根拠にして、単なる年齢のみによる「大人」「小子」の区分を退けたのであった。

このように春台からの批判を契機として、静斎が繰り返し提示したのは、『小学』が単なる子供向けの学習材料ではない、「下」の立場のときに、誰もが読まねばならない書物であるという点であった。同じく「朱子学」を奉ずる閩齋学派のような儒者たちですら『小学』を理解している者が少ない現状を前にして、静斎は、「下」の立場の者であれば（子供を含め）誰もが読まねばならない書として『小学』を再定義し、儒学学習の階梯に位置付けようと試みていたのであった。

おわりに

本稿では、太宰春台による『小学』批判に対して、河口静斎が独自の『小学』観に基づき、春台の批判を反駁していたことを見てきた。

春台が朱熹の言葉に基づいた批判していたために、

静斎は朱熹の言葉を否定することなく、朱熹の言葉を根拠にした春台の言説を退けることが求められた。そのため静斎は、結果的に自らの筆による『小学』理解を明示して、春台への反駁をしなければならなかったのである。無論、それは仁齋・徂徠のような独自の見解を述べることが求められたわけではない。

ただ、静斎の『小学』理解からは、単なる初学教育書の次元に留まらず、誰もが一生涯にわたって学ばねばならない書であると静斎が改めて位置付け直そうと試みていたことが読み取れたのである。

『聖学問答』による徂徠学者との論争や、「赤穂四十七士論」による赤穂義士論争の再燃、『弁道書』による国学者との国儒論争など、太宰春台の主張が物議を醸して論争を引き起こしたケースは少なくない。赤穂義士については、河口静斎も春台の文脈を暗に批判するかたちで論争に参加している。ただ『小学』批判に関しては、静斎以外に目立った反論が管見の限りでは見当たらない。

これは『小学』の儒者世界における重要度にも因るであろう。「朱子学」を奉ずる儒者であるならば、朱熹が初学教育書として位置づけた『小学』を重んずること自体は、全く不自然ではない。ただしその『小学』理解は、同じく「朱子学」を奉ずる閩齋学派の儒者た

ちのなかでも同様ではなかったように、「朱子学」者であっても『小学』への注目には軽重があった。自らの学問世界において『小学』の位置付けが必ずしも高い儒者ばかりではなかった。実際に赤穂義士論に比べれば、『小学』という「朱子学」世界の儒学学習階梯の話は少々限定的であったと思われる。また、春台が『小学』を批判した「朱氏小学論」は「聖学問答」や『弁道書』に比べれば小品である。同じく小品であっても、春台の「孟子論」は、冒頭でも触れたように四書『孟子』に関わり、近世の儒学思想史における『孟子』理解を考察する際の主要な作品である。

ただ逆に静斎は、他の儒者のように『斥非』附録の「孟子論」や『聖学問答』には反応していない⁽³⁵⁾。それがかえって静斎における『小学』の優先順位の高さを窺い知ることが出来る⁽³⁶⁾。それでは、静斎が自らの『小学』理解を示したことの意義は奈辺にあるのだろうか。

まず、一八世紀半ばの儒学教育の現場において『小学』が単なる子供向けの入門書としてではなく、誰もが読まねばならない道徳書として認識されていたことが窺い知れる点である。江戸期の子供向けの書籍は、往来物など手習い書や通俗道徳書など漢籍受容とは異なる方向に広がっていた⁽³⁷⁾。また、この一八世紀半

ばは、儒学学習が徐々に広がりを見せてゆく時代であった⁽³⁸⁾。そのため『小学』は、もはや文字面通りに「小子の学」なので子供向けであるなどと狭く捉えるばかりではいられなかったのである。様々な入門書があるなかで、三宅尚斎や蟹養斎のように儒学教育の学習課程のなかで『小学』の読書の必要を論じる儒者もいた。

その一方、河口静斎の場合は、太宰春台という批評者を得たことで、かえって『小学』の存在意義を示すことが出来たのである。静斎は、『小学』が決して子供のみを対象にした書ではないという理解について、「此の説朱門の学者往々未だ明らかならざる者有り」⁽³⁹⁾、

「然るに学者、(中略)小学を読む者此の義に達せざるも其の失最も遠しとす」⁽⁴⁰⁾などと述べているように、「朱子学」を奉ずる者たちでも軽んじているという意識を心の内に有していた。静斎にとって春台からの批判は、「朱子学」という学問を正しく理解する機会でもあったのだ。そのような意識は、幕初からの儒学の学流を整理した『斯文源流』にも通底した意識である。『斯文源流』もまた、徒にこれまでの儒者を蔑ろにして(古学派や折衷学派が)自らの独自の学問世界を主張する一八世紀当時の儒学思想界の現状を批判的に捉えた書であった。

今世間の諸生を見るに、或は師承の統緒に托して、他門の学を排し、更に一己の是非を問はず、只我門に入る者を主とし、出る者を汚らはしとし、漸く朋党の勢を成す物あり、（中略）先儒

を蔑如して、独り特見を恃む者、其量の小なる事言ずして知べし、是が為に粗従来の所聞を輯て、此一篇を著す。⁽⁴⁾

以上のように静斎は、仁斎・徂徠のように自らの意見を披露して他者を排撃する論調から自らの学問世界を損なわされず、「朱子学」という学問によって、道徳的な人格の完成を果たす妥当性を示すことが、自らの課題として自覚していた。

このような儒者としての河口静斎の学問的活動は、修養論を中心とした「朱子学」の再構成への志向が、天明・寛政期の朱子正学派の儒者たちの登場以前、既に一八世紀半ばには生じていたことを意味するのである。

注

(1) そもそも『小学』とは、「朱子学」の大成者、中国南宋の朱熹（朱子）の監修の下、友人の劉清之らが編集した「朱子学」の初学教育書である。厳密に言えば、朱熹一人の手になる作品ではない。一一八五（淳熙一二）年に

一応の完成を見た。内容は、經典をはじめとする諸書の抜粋で成る。『小学』の〈書題〉において朱熹は、この『小学』を学び始めたばかりの子供達に授けねばならないことを論じている。

日本において朱熹『小学』に関する先行研究は、多いとは言えない。道徳教育を目指した初学教育論として、中国の道徳教育史に朱熹『小学』を位置づけた阿部吉雄「支那教育史上に於ける朱子の小学」（『東方学報』東京・第一一冊、一九四〇）が戦前におけるがそれ以来目立った研究は無かった。近年、〈六芸を『小学』に組み込むかどうか〉という朱熹の礼学思想の変容について『小学』から分析した葉国良・西川芳樹訳「『小学』の論述から見た朱子礼学思想の変化」（『東アジアの儀礼と宗教』関西大学アジア文化交流研究叢刊・第三輯、雄松堂出版、二〇〇八）や、劉清之が編纂の小学書に対して、朱熹がどのように手を加えようとしたか、その編纂方針を分析して朱熹の『小学』思想を考察した松野敏之「朱熹『小学』編纂考―劉清之小学書からの改修に関して―」（『論叢アジアの文化と思想』第一三三号、二〇〇四）などがある。

(2) 『朱子語類』巻七「学一小学」第一九条、記録者は幅広く。訳文は垣内景子訳注『朱子語類訳注』（九箇書院、二〇一〇）を参照。

(3) 拙稿「蟹養斎における『小学』理解から見た初学教育への視線」（『道徳と教育』第三三三三号、日本道徳教育学会、二〇一五）

(4) 朱熹『小学』〈書題〉。書き下し文は、宇野精一『小学』（新釈漢文大系三、明治書院、一九六五）を参照した。

- (5) 「朱氏小学論」をおさめる『斥非』は、関儀一郎編『日本儒林叢書』第四冊（東洋図書刊行会、一九二七）において活字化され、『日本思想大系三七 徂徠学派』（岩波書店、一九七二）に書き下し文が収められている。その一方「春台先生紫芝園後編」は、『近世儒家文集集成六 春台先生紫芝園稿』（べりかん社、一九八六）が市立弘前図書館蔵本を底本に影印本として刊行されている。本論文では、後者の影印本を底本に用いた。原漢文。書き下し文は筆者による。
- (6) 『静齋小学弁評』の底本には京都大学附属図書館蔵本を用いているが、東京都中央図書館所蔵『朱子小学弁』も適宜参考にした。原漢文。書き下し文は筆者による。
- (7) 大庭卓也「漢学者川口静齋と「秉筆録」」（共同研究「江戸時代中期文人大名に見る学芸と思想に関する総合的研究」編『共同研究報告書 鹿島鍋島藩の政治と文化』人間文化研究機構 国文学研究資料館）及び、同「江戸時代漢学者の「語録」とその周辺―河口静齋「秉筆録」―」（久留米大学文学部紀要国際文化化学科編）第二六号、二〇〇九。
- (8) 宇野精一『小学』（新釈漢文大系三、明治書院、一九六五）参照。
- (9) 『大学章句序』。
- (10) 『春台先生紫芝園後編』巻八、一五丁裏～一六丁表。
- (11) 『春台先生紫芝園後編』巻八、一六丁裏～一七丁表。
- (12) 『春台先生紫芝園後編』巻八、一七丁表。
- (13) 『春台先生紫芝園後編』巻八、一七丁表～一七丁裏。
- (14) 『春台先生紫芝園後編』巻八、一八丁表。
- (15) 『春台先生紫芝園後編』巻八、一八丁裏。

- (16) 『春台先生紫芝園後編』巻八、一九丁表。
- (17) 春台の思想について、基本的特徴を捉えたものに、尾藤正英「太宰春台の人と思想」（『日本思想大系37 徂徠学派』岩波書店、一九七二）や小嶋康敬「儒教の世界像の崩壊と太宰春台」（『徂徠学と反徂徠』べりかん社、一九八七）などがある。
- (18) 『静齋小学弁評』、一丁裏。
- (19) 『静齋小学弁評』、二丁表。
- (20) 『静齋小学弁評』、二丁表～二丁裏。
- (21) 『静齋小学弁評』、三丁表。ただし、「譬者の争色、譬者の弁音」の「争」の字は判読不明となっているが、東京都中央図書館所蔵『朱子小学弁』との対校の上補完した。
- (22) 『静齋小学弁評』、三丁裏。
- (23) 『小学内篇講義』〈序〉、大倉精神文化研究所、一丁裏。
- (24) 『大学序講義』、『神道大系 垂加神道（下）』論説編 一三、三〇二頁。
- (25) 『小学』〈題辞〉「惟れ聖斯に惻れみ、学を建て師を立て、以て其の根に培い、以て其の支を達す。」に基づく。
- (26) 阿部吉雄「三宅尚斎の庶民小学教育説と培根達支堂」（『漢学会雑誌』第八巻第一号、一九四〇）において、三宅尚斎は、「培根達支堂」という私塾において、『小学』を庶民への教育に活用したことが指摘されている。
- (27) 三宅尚斎『小学筆記』〈序〉、名古屋市蓬左文庫『道学資講』巻一〇、一丁裏。
- (28) 蟹養斎『小学国字解』〈巻之一序〉、大倉文化研究所、一丁裏。
- (29) 蟹養斎『小学国字解』〈巻之一序〉、一一丁表。
- (30) 朱熹『大学或問』。

(31) 『静斎小学弁評』 「小学論」、七丁裏。

(32) 『静斎小学弁評』 「小学論」、八丁表。

(33) 『静斎小学弁評』 「小学論」、九丁表。

(34) 引用文は東北大学附属図書館所蔵の天明六年刊本を使用した。

(35) 春台が「孟子論」や「聖学問答」などを出したことによる論争に関しては、小島康敬『徂徠学と反徂徠』（ペリカン社、一九九四年）や野口武彦『王道と革命の間―日本思想と孟子問題』（筑摩書房、一九八六）などに詳しい。たとえば『斥非』が出た後に深谷公幹『駁斥非』（明和元・一七六四年）を出して反論しているが、その附録に「弁非孟論」を収録して、やはり春台の孟子論に反論している。ただし逆に深谷も、静斎のように『小学』に対する反駁は取り上げていない。

(36) 河口静斎の発言を書き留めた随筆『秉筆録』において、「一 四書小学我敬信如三神明」〈許魯齋如父母〉（夏集、六五丁表・祐徳稲荷神社蔵）という一文が見える（〈 〉内は割注）。この一句は中国の許魯齋という儒者の言葉である。魯齋が『小学』を重んじていたことは夙に知られることであり、黄宗羲『宋元学案』巻九〇〈魯齋学案〉のなかでも有名な一句である。この一句に「如父母」という割注を付けていることから、静斎もまた格別『小学』を重んずる儒者であったことが窺えるのである。

(37) 同時代の子供向けの書籍と言えば、近世往来物に代表される読み書きの手習いを中心としたものであった。石川謙『近世庶民教育史』（東亜出版社、一九四七）にはじまり、枚挙に暇がない。近年に絞れば、和田充弘「近世往来物作者における庶民教育論―中村三近子を事例とし

て」（『日本教育史研究』第二五号、日本教育史研究会、二〇〇六）にはじまる一連の近世往来物研究や梅村佳代『近世民衆の手習いと往来物』（粹出版社、二〇〇二）や丹和浩『近世庶民教育と出版文化―「往来物」制作の背景―』（岩田書院、二〇〇五）などが代表的研究としてあげられよう。また、テキストとしても石川松太郎監修『往来物大系』（大空社、一九九二―一九九四）が影印本として代表的な作品をまとめている。

(38) たとえば地方でも、刈田郡平沢村主を勤めた仙台藩士高野倫兼（一七〇一年―一七八二年）が、『高野家記録』「退隠記」（『蔵王町史』資料編二）で『小学』の重要性を説いたのも同時期である。この頃地方においても『小学』は、道徳的な完成を目指す書として童子以外の者でも読むことが流布し出した時代であると言えるであろう。

(39) 『静斎小学弁評』、一〇丁表。

(40) 『静斎小学弁評』 「小学論」、一〇丁表―一〇丁裏。

(41) 『新三十幅』一〇「斯文源流」（国書刊行会、一九一七）。

Aspect of Seisai KAWAGUCHI's logics on *Shogaku*

–Confucian Educational Ideas in Mid Edo Period–

Yasuhiro TAKAHASHI

This article elucidates the aspect of the understanding by Seisai KAWAGUCHI (1703 – 54) of *Shogaku* –the elementary educational book of Shushigaku (Neo-Confucianism). Responding to the criticism on *Shogaku* by Shundai DAZAI (1680-1747) and other members of Sorai School, Seisai wrote counterargument texts. Shundai raised questions on the fact that *Shogaku*'s targeted readers were children. Originally, *Shogaku* was said to have been created for children. However, in it, there are many articles that seem to have been addressed to teachers or parents. Shundai, therefore, criticized Shushigaku based on the reasoning that the book was not appropriate as a book for children. Seisai KAWAGUCHI was the only one who refuted Shundai's criticism. Seisai, who was a scholar of Shushigaku, was required to dismiss the arguments of Shundai without denying the words of Zhu Xi. In his refutations, Seisai's own understanding of *Shogaku* emerged.

In the first place, Seisai criticized such fixed perceptions to regard *Shogaku* as a book for children. Seisai regarded *Shogaku* as [a book that anybody should study throughout their lives]. From the Confucian scholastic grade's point of view, after *Shogaku*, one would go onto the stage of reading *Daigaku*. While *Daigaku* is the book for various people of 'upper' positions such as princes or parents, Seisai tried to place *Shogaku* as a book for various people of 'lower' positions.

At that time, there were more than few Neo-Confucian scholars who regarded *Shogaku* as a book for children. The criticism from Shundai provided an opportunity to correctly understand the scholarship of Shushigaku. From Seisai KAWAGUCHI's analytics of *Shogaku*, we can see that there had been attempts to reconstruct Shushigaku based on cultivation of the mind even before Kansei era (1789 – 1801).